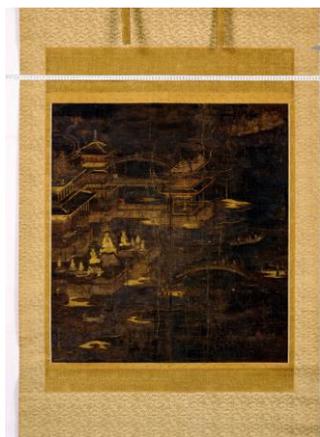


平成23年度購入文化財一覧

【九州国立博物館】(計 16 件)

- 1 ○種 別 <絵画>
○名 称 紙本著色病草紙断簡(尿を吐く男)
(しほんちゃくしょくやまいのそうしだんかん(くそをはくおとこ))
- 作 者 等
○時 代 平安-鎌倉時代、12世紀
○品 質 紙本著色。掛幅装。
○員 数 1幅
○寸 法 等 縦26.4 横33.7 cm
○作品概要 萩や薄など秋草の茂る籬に向かい、石に腰を下ろして嘔吐する男を描く。様々な病気や先天的な身体障害を描いた「病草紙」のうちの一図。現在は一段ずつ掛幅装に改装され、本図を含む「病草紙」15段は、昭和初期まで1巻の卷子として名古屋の関戸家に伝来していた。作風をみると、顔貌や衣文、草花の形態などに「地獄草紙」(国宝、東京国立博物館所蔵)や「餓鬼草紙」(国宝、京都国立博物館所蔵)に極めて近い表現を見出すことができる。これらは、12世紀末に後白河法皇のもとで活躍し、「年中行事絵巻」(現存せず)や「伴大納言絵詞」(国宝、東京・出光美術館所蔵)を描いたとされる宮廷絵師・常盤光長の制作と考えられていることから、本図も後白河法皇や光長の関与により制作されたものと推測される。この時期の絵画を代表する優品。
- 来 歴 大館高門(1776-1839)、関戸家旧蔵
○購入金額 249,900,000円(平成23年度第1回鑑査会議)
- 2 ○種 別 <絵画>
○名 称 絹本著色阿弥陀浄土図
(けんぼんちゃくしょくあみだじょうどず)
- 作 者 等
○時 代 鎌倉時代・13世紀
○品 質 絹本著色。掛幅装。画絹一副一鋪。
○員 数 1幅
○寸 法 等 縦85.5 横78.0 cm
○作品概要 ほぼ正方形の画面に、やや俯瞰気味に阿弥陀の極楽浄土を描く。画面向かって左側に設けられた壇上に阿弥陀三尊が坐し、周囲には合掌する菩薩たちが侍している。阿弥陀の背後には、多層の楼閣がL字状に設けられ、楼閣の前には水面が広がり、阿弥陀に向かって漕ぎ寄せる舟が2艘浮かぶ。画面向かって右上方には、雲に乗って浄土を目指す帰りに来迎をあらわしている。制作年代については、金色(截金、金泥)を多用する点、細身の体軀や頭体のバランス、細密画風の描写などから、鎌倉時代後半の作と推測される。本図は、浄土を斜めに捉えた類例の少ない作品の一つとして貴重である。また、鎌倉時代の作品との図像的なつながりを様々に示しており、鎌倉時代以降の浄土教絵画の多様な展開を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる作品として、きわめて価値が高い。
- 来 歴 福岡孝悌(1835-1919)旧蔵
○購入金額 63,000,000円(平成23年度第2回鑑査会議)
- 3 ○種 別 <絵画>
○名 称 絹本墨画羅漢図
(けんぼんぼくがらんず)
- 作 者 等
○時 代 中国 南宋-元時代・13世紀
○品 質 絹本墨画。画絹一副一鋪。
○員 数 1幅
○寸 法 等 縦109.0 横51.8 cm
○作品概要 土坡に横を向いて坐し、光を発する宝塔をささげる羅漢を表す。羅漢は、着衣



を先割れのある粗放な濃い墨線で簡潔に描き、宝塔は阿育王塔に共通する形状を部分的にもつ。その上方には扇形に広がるかすかな墨面のグラデーションがあり、宝塔が光を発するさまを表すと思われる。表現からみて本図は、中国・唐時代から五代時代にかけて活躍し逸格画風の人物画を得意とした禅月大師・貫休(832-912)の伝承作品と位置付けることができる。その羅漢図の模本とみられる伝承作品は約10点が現存しているが、なかでも本図は根津美術館本や藤田美術館本など同様に、画家の様式をよく伝える有力な作例である。日本において貫休の様式は「禅月様」として室町時代以降、雪舟や伊藤若冲らに継承されてゆく。そのため本図は、日本における中国絵画の受容を理解する上で重要である。

○来歴

○購入金額 50,000,000円(平成23年度第2回鑑査会議)

4 ○種別
○名称

<彫刻>
地藏菩薩遊戯坐像
(じぞうぼさつゆげざぞう)

○作者等

○時代

朝鮮 高麗時代・14世紀

○品質

銅鑄造。鍍金。彩色。

○員数

1軀

○寸法等

総高49.2 像高26.6 cm

○作品概要

頭巾を被り、裙・衲衣を着け、袈裟を掛ける。両手で宝珠を執り、左足をやや前に投げ出して蓮華座に坐り、右足を踏み下ろして小蓮台に載せる。踏み下ろした右足および小蓮台部を除く台座部までを含み、蟬型による一鑄とする。全体的に鑄肌はやや荒れており、鍍金層もかなり溶けている。肉身部や台座框部に彩色がわずかに認められる。

本像に見る、ふっくらとした面貌の肉付き、明快に表された目鼻立ち、伸びやかな上体の表現等は、高麗時代後期に制作された仏像の特徴である。鑄造技術や細部の彫法も手慣れており、極めて完成度が高い。頭を頭巾で覆ったいわゆる被帽地藏であること、蓮華座に坐って片足を踏み下ろすという遊戯坐形式であることは、彫像では類例が極めて少ないが、絵画作例としては高麗時代後期・14世紀に数多く描かれる形式であることから、本像の制作時代も同時期が想定される。

北部九州をはじめとする西日本には朝鮮半島で制作された作品が数多く伝来しており、とりわけ高麗時代の仏教美術に優れた作品が多い。高麗時代彫像の優品として名高い対馬島伝来の本像は、明確な記録はないものの中世における日朝間の活発な往来過程で請来された遺品であり、当館が収蔵すべき質と歴史を有する作品である。

○来歴

○購入金額 133,350,000円(平成23年度第2回鑑査会議)

5 ○種別
○名称

<歴史資料>
朝鮮通信使川御座船図 六曲屏風
(ちょうせんつうしんしかわござふねず
ろっきょくびょうぶ)

○作者等

○時代

江戸時代・17-18世紀

○品質

紙本金地著色。屏風装。

○員数

1隻

○寸法等

縦78.3 横251.0 cm

○作品概要

幕府や西国大名は、大坂に淀川を航行する川御座船をおいていた。朝鮮通信使は、朝鮮王朝が幕府へ派遣した使節団で江戸時代には12回を数える。江戸へ上る通信使の行程は、王城から釜山に至り、渡海して対馬府中(厳原)に入り、壱岐-藍島-赤間関-上関から瀬戸内海を東へ向かい大坂に達した。それより、諸大名提供の川御座船に乗って淀川をさかのぼり、淀浦からは陸路を通り江戸



に到った。朝鮮通信使の構成は、300 から 500 人の人員を擁し、正使、副使、従事官の三使を中心に成っていた。本図は、淀川を航行する川御座船を描いたもので、「上判事第三船」の旗が描かれることから朝鮮通信使のうち上判事を乗せた船と考えられる。朝鮮通信使の姿は描かれていないが、扉の閉じられた牀几の間の中に座しているという想定かと推測される。この船は、扇紋から肥前国島原藩主松平家のもと考えられる。

○来 歴

○購入金額 8,500,000円（平成23年度第2回鑑査会議）

6 ○種 別
○名 称

<書跡>
紙本墨書足利尊氏願経 妙法聖念処経
(しほんぼくしょあしかがたかうじがんきょう
みょうほうしょうねんしよきょう)

○作 者 等

○時 代

南北朝時代・文和3年(1354)

○品 質

紙本墨書。発願文は墨刷。折本装。包背装。

○員 数

5帖

○寸 法 等

各表紙：縦28.4 横11.8 本紙：各縦28.4

巻第一 624.5 巻第三 611.3 巻第四 400.3

巻第五 541.7 巻第六 528.5cm

○作品概要

室町幕府を開いた足利尊氏（1305-58）が文和3年(1354)正月23日に発願して京、南都、近江、鎌倉の諸僧に書写させた一切経。発願文によると、後醍醐天皇や尊氏の両親、元弘の乱以後の戦乱で亡くなった人々を弔い、天下泰平と民衆の安楽を願ったものである。文和3年12月23日に等持院で一切経供養が行われたが、直後に園城寺に移された。当初は総数が5,000帖を超えていたと考えられるが、現在は700帖余りの存在が知られており、園城寺所蔵の592帖は重要文化財に指定されている。

足利尊氏願経は、巻尾に5行あるいは4行の発願文を木版で摺写し、「尊氏」の2字だけを自署するのが特徴であり、本経も5行の発願文を備えている。また、宋版や元版をテキストに用いたことが知られている。奥書に書写と校合した人物名が記される。原装をよく保っている。

○来 歴

園城寺旧蔵

○購入金額

12,000,000円（平成23年度第3回鑑査会議）



7 ○種 別
○名 称

<書跡>
紙本墨書舎人国足願経 瑜伽師地論 卷第六十三
(しほんぼくしょとねりくにたりがんきょう
ゆかしじろん まきだいらくじゅうさん)

○作 者 等

○時 代

奈良時代・天平16年(744)

○品 質

紙本墨書。折本装。

○員 数

1帖

○寸 法 等

表紙：縦24.3 横8.5 全長709.6 折本幅8.1 cm

○作品概要

『瑜伽師地論』は全100巻。300-350年頃に成立。無著(アサンガ)が弥勒菩薩の霊告によって造ったとされる。瑜伽行派の根本論書の一つで、3-4世紀頃のインドの仏教研究を網羅する。法相宗で重要經典とされる。

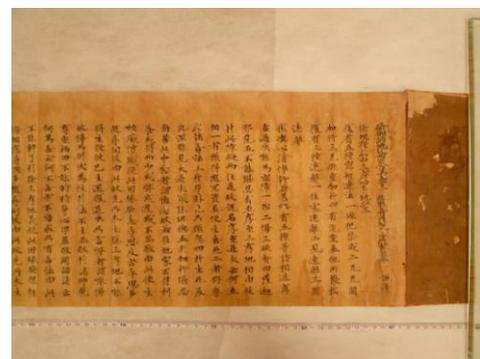
この写経は、もともと滋賀県・石山寺旧蔵の『瑜伽師地論』の一帖であり、奥書に「天平十六年歳次甲申三月十五日／讚岐国山田郡舎人国足」と書かれていることから、舎人国足願経と呼ばれる。石山寺には35巻が現存する。漉きむらが多く、打ち紙が施された古様の楮紙に、奈良時代中期以前の写経と共通する謹厳な書風で書写された古写経である。

○来 歴

石山寺旧蔵

○購入金額

8,500,000円（平成23年度第3回鑑査会議）



8 ○種 別 <染織>
○名 称 端物切本帳
(たんものきれほんちょう)

○作 者 等 芦塚太郎八・芦塚真八

○時 代 江戸時代・19世紀

○品 質 和紙仮綴

○員 数 13冊

○寸 法 等 各縦26.0 横19.0 cm

○作品概要 和紙を仮綴した縦帳で、表題が残るものには全てオランダを意味する「紅毛」の文字と、「芦塚」の署名がある(13冊のうち10冊は表紙欠失)。端物切本帳は、輸入染織に関する史料であり、反物目利と呼ばれる輸入染織を鑑定・評価する長崎奉行配下の役人によって記録されたもので、本切本帳は、反物目利芦塚家7代太郎八と、8代真八が反物目利として輸入染織の鑑定にあっていた時期のものにあたる。同じ芦塚家伝来とされる東京国立博物館所蔵の端物切本帳と比較すると、本切本帳は、東博本が横帳であるのに対し縦帳で、貼られた裂は、ほとんどが更紗裂である。また両裂本帳に見られる更紗のうち、文政7年(1824)、文政11年(1828)入港のオランダ船がもたらした更紗の種類が一致している。平均して1丁に8枚前後の輸入裂が種類ごとに分類して貼られ、裂の右上に反物名とその格付けが墨書されているものもある。

○来 歴 芦塚家伝来

○購入金額 3,700,000円(平成23年度第3回鑑査会議)



9 ○種 別 <染織>
○名 称 緑地花菱繋ぎ文更紗
(みどりじはなびしつなぎもんさらさ)

○作 者 等 インド・コロマンデル海岸

○時 代 18-19世紀

○品 質 木綿単糸平織(経:Z・36本/cm 緯:Z・31本/cm)。

片面染め、描き染め、蠟防染。

○員 数 1枚

○寸 法 等 縦358.0 横113.0 cm

○作品概要 インド更紗。中央部は、緑地に側面形の花弁文を主文とし、周りに8弁の花弁文を菱繋ぎに連ねる。中央部の天地には端から茜、黄、白、藍、茜、茜、茶色の順に地色を染めた7条を配し、それぞれ火焰形花卉文、幻獣ガルータ、鬼面キルティムカ、唐草から生じる獅子面、日本で「仏手」と称される両手を合わせる天人形などを連続文様としてあらかず。中心部の周縁および天地にあしらった火焰形花卉文は、それぞれの先端が糸目状に伸び、全体で縞をなしている。布の裏面には墨書で蘇州号碼が記されている。

本品のように濃い地色を基調に、蠟防染で白抜きされた細線で細かな文様をあらわした更紗を日本では「暹羅手」と称し、茶人に愛好された。本来はインドがタイのアユタヤ朝(シャム王国)向けに制作した更紗である。

○来 歴

○購入金額 6,500,000円(平成23年度第3回鑑査会議)



10 ○種 別 <陶磁>
○名 称 白磁経筒
(はくじきょうづつ)

○作 者 等 中国南部

○時 代 宋代・12世紀

○品 質 白磁

○員 数 1合

○寸 法 等 総高36.7 口径(身)12.0 (蓋)15.1 底径12.1 cm

○作品概要 白磁の経筒。胎土は黄白色。左回轉轆轤成形、左回轉轆轤削り。身はごく細く浅い高台を削り出し、ハの字状に広がる裾をもつ。胴部最大径が中央にあり、やや丸みがある胴部である。口縁部はそのまま引きあげ直立する。裾には間弁つきの反花を刻み、一葉ごとに厚みを持たせ立体感ある蓮弁をあらわしている。



釉は青味のある白色。底部に丸目跡の痕跡が見える。蓋は宝珠形のつまみがつき、身の裾と同様の上方を向く間弁をもつ蓮弁文をつくり、反り返る口縁部を持つ。共伴品には、青白磁花卉文合子、青白磁輪花皿がある。

平安時代末に経塚の造営が盛んになると、経塚に経を埋納する容器として、経筒が用いられる。その素材については、青銅製が主流であるが、陶磁器製のものも見られる。本作品のように、白磁で蓮弁を厚肉深彫で立体的に仕上げた例は稀少で、極めて貴重である。これらは、日本から注文し中国で制作されたとも考えられ、平安時代の中国との交流を考える上で重要な作例である。

○来歴

○購入金額 12,000,000円（平成23年度第3回鑑査会議）

11 ○種別
○名称

<歴史資料>

紙本墨書今川了俊書下

（しほんぼくしよいまがわりようしゅんかきくだし）

○作者等

○時代

南北朝時代・嘉慶2年(1388)

○品質

紙本墨書。縦紙。掛幅装。

○員数

1幅

○寸法等

縦27.0 横46.0 cm

○作品概要

今川了俊(貞世、1326-?)は、貞治6年(1367)に室町幕府引付頭人となり、同年末、第2代將軍足利義詮の死去を機縁に出家し貞世から了俊にあらためた。応安4年(1371)には第3代將軍足利義満によって南朝方制圧のため九州探題に任命された。翌5年には大宰府を掌握し、その後、紆余曲折を経ながらも九州経営は実を結び、九州探題を解任される応永2年(1395)まで続いた。

本文書は、宗像大宮司宗像氏頼に対して、所々神領ならびに筑前国朝町村(現宗像市)、山口郷(現宮若市)、土穴郷(現宗像市)、平等寺(現宗像市)等に関する義満の安堵を施行したもの。

なお、本文書の内容は、「宗像系図」(個人蔵)所収の写しによって知られていたが、このたび正文の存在が初めて知られることとなった。

○来歴

○購入金額 2,500,000円（平成23年度第3回鑑査会議）

12 ○種別
○名称

<歴史資料>

紙本墨書島津氏等文書集

（しほんぼくしよしまづしとうもんじょしゅう）

○作者等

○時代

鎌倉-江戸時代・14-17世紀

○品質

紙本墨書。卷子装。

○員数

1巻(10通)

○寸法等

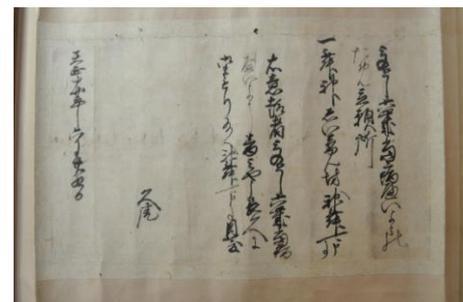
卷子 縦38.9 全長565.7 cm

○作品概要

全10通のうち4通は織豊期の島津氏関連、4通は鎌倉・南北朝期の稲本氏・小浜氏関連文書である。No.1は島津義久(1533-1611)が父貴久(1514-71)の三十三回忌追善に手向けた和歌6首。No.2-4は義久の甥忠恒(家久、1576-1638)が受け取った書状で、No.4は加藤清正(1562-1611)が釜山浦の番船の進退を確認したもの。No.5-6は島津氏家臣頼娃久虎が息子の病氣平癒を祈願した願文。No.7は宗像氏の一族稲本氏純の南朝方肝付兼重討伐に係る着到状で畠山義顕によって「承了(花押)」と書かれている。No.8は加瀬田城(現鹿児島県曾於郡輝北町)における南朝方肝付兼隆攻略にかかる稲本氏純宛の足利直義の感状。No.9は小浜二郎への大隅国鹿屋院(現鹿児島県鹿屋市)下村半分地頭代官職を預け置いた島津貞久(1269-1363)の預状。No.10は小浜村(現鹿児島県始良郡隼人町)に対して宮の祭礼費用負担を命じた領家下文。

○来歴

○購入金額 5,500,000円（平成23年度第3回鑑査会議）



13 ○種 別
○名 称

<歴史資料>
紙本墨書朝鮮通信使進物目録
(しほんぼくしよちょうせんつうしんしんもつもくろく)

○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

江戸時代・享保4年(1719)
紙本墨書。縦紙。

1通
縦42.6 横63.0 cm

本目録は、享保4年(1719)に徳川幕府第8代将軍徳川吉宗(1684-1751、第8代征夷大将軍1716-45)襲封祝儀のために来日した朝鮮通信使の正使・副使・従事官が、連名で石見津和野藩主亀井隠岐守茲親(これちか)(1669-1731)へ送った贈答品の目録である。茲親の室は宗義真の女であり、その関係で本目録が送られたと推測される。朝鮮通信使から大名宛に出されたこのような目録は、他に3通が知られ、うち2通は石見亀井家文書(国立歴史民俗博物館所蔵)に含まれる天和2年(1682)と正徳元年(1711)のもので、いずれも茲親宛である。これらには黄色の染め紙が用いられている。ほかに正徳元年に萩藩主毛利吉元に送られた山口県所蔵の目録がある。これは白紙に書かれ、贈答品自体も残っていて、一括して重要文化財に指定されている。本状が黄色の染紙であることについては、朝鮮の文献『通文館志』に「中路問安使江戸問安使各」に対しては「以上皆以色紙单子」という記述に一致している。

○来 歴
○購入金額

石見津和野藩旧蔵
2,500,000円(平成23年度第3回鑑査会議)



14 ○種 別
○名 称

<歴史資料>
紙本墨書豊臣秀吉朱印状 遠藤彦右衛門・助二郎宛
(しほんぼくしよとよとみひでよししゆいんじょう
えんどうひこえもん・すけじろうあて)

○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

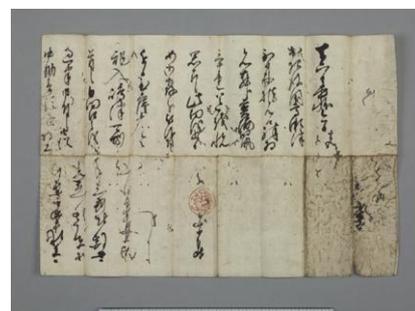
安土桃山時代・天正15年(1587)
紙本墨書。折紙。

1通
縦32.1 横47.6 cm

豊臣秀吉が天正15年(1587)に行った島津氏平定の戦いである九州征伐の最中に発給されたもの。遠藤彦右衛門と助二郎に宛てて、受け取った書状を読んだことと送られた煎海鼠30連の礼を述べ、近日中に薩摩へ攻め込むこと、中納言(羽柴秀長、1541-91)から日向の戦況についても順調な旨の報告があったことなどを伝えている。戦況についての秀吉の生々しい表現も含まれ貴重である。また、本状は4月14日付けであるが、本文中では遠藤の書状を15日に肥後国高瀬津(現熊本県玉名市)にて読んだと記されている。遠藤彦右衛門は美濃国郡上の武士遠藤胤重と推測される。『寛政重修諸家譜』では、胤重の弟胤安が兄胤俊と九州征伐に従軍し、豊前国岩石城にて討死したことが記される。『九州御動座記』によると、秀吉は13日に高瀬津に舟で入り、大雨のため中2日逗留し、16日には隈本城に入ったとされており、この記述にも一致する。

○来 歴
○購入金額

1,700,000円(平成23年度第3回鑑査会議)



15 ○種 別
○名 称

<歴史資料>
紙本墨書豊臣秀吉朱印状 高麗国中宛
(しほんぼくしよとよとみひでよししゆいんじょう
こうらいこくちゅうあて)

○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数

安土桃山時代・天正20年(1592)
紙本墨書。縦紙。
1幅



○寸法等
○作品概要

縦 43.5 横 59.8 cm

禁制は、合戦の際に自軍の統制をとるために発給される文書で、国内の合戦に係わる禁制は数多く残っている。本禁制は一行目に「禁制 高麗国中」と書かれていて、高麗国中に宛てられたものであり、秀吉の軍勢による濫妨狼藉、放火、朝鮮人への非分を禁じた内容である。異国に在陣中の軍勢に宛てた禁制は、文禄・慶長の役の時のものが唯一である。

天正 20 年(1592)4 月半ば、小西行長・宗義智の第一軍が釜山鎮を襲撃して、文禄・慶長の役の口火が切られ、5 月初旬にはソウルを陥落させた。本禁制は「天正廿年五月日」の日付があり、その頃のものである。なお、島津家文書(国宝、東京大学史料編纂所蔵)には、これに先立つ天正 20 年 4 月 26 日付けの禁制がのこされている。

○来歴
○購入金額

保田元義、久保田美英旧蔵
4,000,000円(平成 23 年度第 3 回鑑査会議)

16 ○種別
○名称

<歴史資料>
紙本墨書豊臣秀吉朱印状 蜂須賀阿波守宛
(しほんぼくしよとよとみひでよししゅいんじょう
はちすかあわのかみあて)

○作者等
○時代
○品質
○員数
○寸法等
○作品概要

安土桃山時代・天正 20 年(1592)
紙本墨書。折紙。
1 幅
縦 45.4 横 66.1 cm

天正 20 年(1592)4 月半ば、小西行長・宗義智の第一軍が釜山鎮を襲撃して、文禄・慶長の役の口火が切られ、5 月初旬にはソウルが陥落した。6 月、秀吉は朝鮮渡海を企てるが、徳川家康らの諫止により延期した。本状の宛名である蜂須賀阿波守は徳島藩藩祖家政(幼名小六、号は蓬庵、1558-1638)で、第五軍として参戦した。

本状の内容は、翌年 3 月に予定された秀吉の渡海に備えて、釜山からソウルまでの往還を確保し、城普請や兵糧確保につとめること、船を漕ぎ戻し、加子を休め兵糧を積みよこすこと、などを指示したもの。同日付けで同様の指示を記した朱印状が島津家など他の武将へも送られている。

本紙の朱印から徳島藩に伝来したことが分かる。大正 3 年(1914)12 月に徳島県が刊行した『蜂須賀蓬庵』の口絵に本状の写真が掲載されているが、所蔵者名は明記されていない。

○来歴
○購入金額

徳島藩伝来
4,500,000円(平成 23 年度第 3 回鑑査会議)

